

令和6年度 長崎市自然環境調査報告書：植物

長崎市自然環境調査委員 中西 弘樹

1. 長崎市から初めて発見された植物

○シャク(セリ科)

長崎県内では県北を中心に林縁部にふつうに見られます。西彼杵半島では西海市に多く見られますが、長崎半島から西彼杵半島の南部(長崎市)にはこれまで発見されていませんでした。長崎市内では池島ではじめて発見することができました。花は白色で、ヤブニンジンやヤブジラミとよく似た、セリ科の特徴的な花を春に咲かせます。



図 1. シャク(池島)

○ホザキノミミカキグサ(タヌキモ科)

長崎県にはミミカキグサの仲間はムラサキミミカキグサが最も多く、次いでミミカキグサで、ホザキノミミカキグサはまれです。花はピンクで、花弁の距は上向きになるのが特徴です。ミミカキグサの仲間は、中間湿原に生育し、長崎県では西彼杵半島に比較的多く見られましたが、多くは埋め立てやスギ植林地となり、少なくなりました。したがって今では絶滅危惧種となっています。

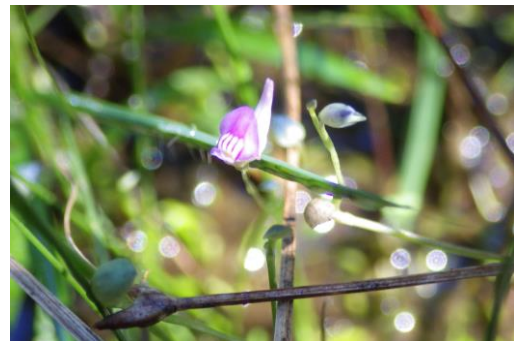


図 2. ホゼキノミミカキグサ(長浦町)

○オニドコロ(ヤマノイモ科)

内陸部の山地にはふつうに見られますが、沿岸部には少ないです。長崎市内にはこれまで発見されてませんが、英彦山の北側、すなわち本河内二丁目から三丁目付近の林縁には点々と生育していることが発見されました。ヤマノイモは種子の周囲に翼がありますが、オニドコロは種子の一方向だけに翼が発達しているのが特徴です。



図 3. オニドコロ(本河内二丁目)

2. 長崎市から初めて発見された外来植物

○コバノニシキソウ(トウダイグサ科)

中国南部、台湾、フィリピン原産の外来植物で、茎の節から発根することで、他の類似種と区別されます。葉は歪んだ広楕円形、表面は無毛、色は青緑色で、茎は紅色であり、密に地表面を被っています。慣れると遠方からもよくわかります。県内では最初に対馬市峰町に生育しているのが発見されています。



図 4. コバノニシキソウ(池島)

○オオバナコマツイグサ(アカバナ科)

花の直径が3~4cmと、ふつうのコマツイグサよりも倍くらい大きい。その他の特徴はコマツイグサと変わらず、変種となっていますが、区別ができないような中間の花のものもあります。花期は3月下旬から7月までで、夕方から薄黄色の花を咲かせ、翌日には橙色に変わり、閉じます。植物体は多く分枝し、匍匐します。香焼町の海浜に生育するのを県内で初めて発見することができました。



図 5. オオバナコマツイグサ(香焼町)

○インカカタバミ(カタバミ科)

南アフリカ原産の園芸植物で、逸出野生化したものです。本種の特徴は濃紫色をした葉で、葉表にはあまり目立ちませんが、やや薄い紫色の斑点があります。花は薄いピンク色をしています。園芸用に導入されたカタバミ科の植物で、野生化したものは少なくありません。中には有害外来種となっているものもありますが、本種は繁殖力が強くないせいか、現在の状態ではその心配はないようです。



図 6. インカカタバミ(春山町)

○シノブボウキ(キジカクシ科)

アスパラガスは食用や観賞用に導入された複数の品種があるようです。沖縄本島には野生化したものが知られていますが、本土ではまだ知られていないようです。野母町畦津の林縁部にはかなり広い範囲で野生化しているのを発見しました。葉のように見えるのは細枝で、細い円柱形をして輪生します。小枝の基部には葉が変形した鱗片葉があり、棘状となります。ヨーロッパ原産で明治時代に日本に導入されました。



図 7. シノブボウキ(野母町)

3. 発見された貴重植物

○マツバラン(マツバラン科)

根も葉も発達していない原始的なシダ植物で、マツバラン科の唯一の種であります。枝は2又分岐して、高さ15～20cmぐらいで、岩や樹木の幹に着生していますが、まれには地上から生えている場合もあります。まれな植物で絶滅危惧種に指定されていますが、最近は市街地の石垣や鉢植えの中に生育していることもあり、温暖化で孢子が飛散し、思わぬ所に突然生えてくるものと思われます。脇岬町のアコウの幹に着生しているのを発見しました。



図 8. マツバラン(脇岬町)

○ケホシダ(ヒメシダ科)

亜熱帯性のシダで、かつては長崎県内では五島福江島だけに知られていましたが、本土側にも長崎市蚊焼町、竿浦町、西彼杵郡長与町で発見されていました。今回香焼町辰の口で5株発見することができました。和名のように葉全体に軟毛が生えています。類似種のイヌケホシダも南方系のシダで、近年になって拡がり、今では市街地の石垣などにふつうに見られるようになりました。ケホシダも温暖化に伴い、拡がっているようです。



図 9. ケホシダ(香焼町)

○ヘゴ(ヘゴ科)

これまで長崎市内では、旧長崎市に2カ所知られていましたが、2カ所とも生育地の近くに砂防ダム建設のための道路ができたために、乾燥化によってヘゴは枯死しました。その後、脇岬町、野母町で1株ずつ発見されています。今年度、絶滅した旧長崎市の2カ所の生育地を調べた結果、どちらも小さい株が1カ所は8株、もう1カ所は5株が生育していることがわかりました。枯死する前の株の胞子から繁殖したものと思われます。



図 10. ヘゴ(竿浦町)

○シュスラン(ラン科)

照葉樹林の林床に生育する小型のランで、市内ではこれまで生育していた記録はありましたが、現在も確実に生育している場所は知られていませんでした。琴海戸根町の神浦川上流部分を詳しく調べた結果、群生している場所があり、50株以上が見られましたが、数日後に行ってみると、イノシシの攪乱の影響を受けていました。9月中旬に穂状の花序を伸ばし、薄紅色の花を咲かせます。



図 11. シュスラン(琴海戸根町)

○ヒメフタバラン(ラン科)

早春に花を咲かせる小型のランで、林床に生育します。長崎市内にはこれまで数カ所に生育地が報告されていますが、現在でも確実に生育している場所は畦別当町と平間町の2カ所だけでした。今回岩屋山の西部山麓に生育していることが確認されました。長崎県内では佐世保市、諫早市、五島市、長崎市だけです。



図 12. ヒメフタバラン(上浦町)

4. 長崎市のヘゴの分布

長崎県では古くから五島列島にヘゴが分布していることが知られ、生育地の中には国や県の天然記念物に指定されている所もあります。1998 年に筆者が本土側では初めて長崎市草住町でヘゴを発見することができました。以後、市内では竿浦町でも発見されました。しかし、このいずれの生育地も、砂防ダムの建設のための取付け道路が近くを通り、周辺の植生が伐採され、乾燥化したため、枯死してしまいました。最近になって脇岬町、野母町でも発見することができました。そして今年になって絶滅した草住町、竿浦町を調べた結果、草住町は 8 株、竿浦町は 5 株の小個体が生育していることがわかりました。恐らく、枯死する前の親株の孢子から繁殖したものでしょう。その結果、長崎市内にはヘゴは 4 カ所 15 株が生育していることになりました。尚、本土側では長崎市以外で西海市に 2 カ所に生育地があります。

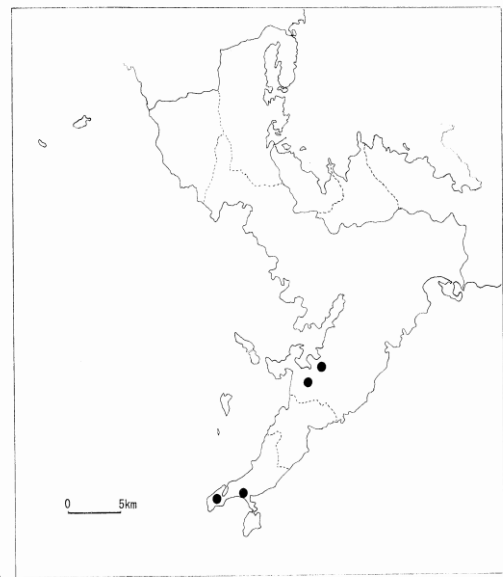


図 13. 長崎市のヘゴの分布